



Title	障害児の親の会（SHG）へのかかわり方にみた障害児の母親の心理的エンパワメント・プロセス
Author(s)	林, 知里; 伊藤, 美樹子; 早川, 和生
Citation	日本健康教育学会誌. 2002, 10(1-2), p. 9-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51815
rights	Copyright © 日本健康教育学会
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

障害児の親の会（SHG）へのかかわり方にみた 障害児の母親の心理的エンパワメント・プロセス

林 知里*¹ 伊藤 美樹子*¹
早川 和生*¹

目的：本研究では、障害児の母親が障害児の親の会（以下SHGとする）に主体的に参加するまでのプロセスを質的に分析することにより、母親の「心理的エンパワメント」とSHGへのかかわり方との関連を明らかにすることを目的とした。

方法：2つのSHGに参加している母親16人と父親1人にインタビューを行った。SHGへの参加期間が多様になるように配慮し（理論的サンプリング）、参加期間1年程度（4人）、3～7年（7人：父親1人を含む）、10年以上（5人）を対象として選定した。インタビューは質問票を用いて半構造的に行い、データの分析には、B.Glaser and A.Strauss の Grounded Theory 法を用いた。

結果：SHGへの『かかわり方』には、1)『興味・関心・動機付けから模索的参加』2)『模索的参加から探求的参加』3)『探求的参加から支援的参加』という3つの段階があり、各段階に応じて、1)『人・自分を理解する力』2)『違いを認め尊重する人間関係を築く力』3)『人の力を引き出す力』の3つの能力が形成されていた。『かかわり方』の中では、「自分の客観視、相対化」、「メンバーの多様性の気づき」、「経験の語り」の経験が、力の形成と関係していた。〔日健教誌 2002；10（1・2）：9-20〕

キーワード：心理的エンパワメント、障害児の親の会（SHG）、主体的参加

1 緒 言

親が子どもの障害を受容する過程の古典的理論として、悲しみの沈静化について述べたKlaus et al.¹⁾の<悲嘆の過程>がある。これは、1. ショックの段階、2. 否認の段階、3. 悲しみ、怒り、不安の段階、4. 適応の段階、5. 再起の段階の5段階からなるが、子どもの障害を「不幸」や「発達の遅れ」「克服すべきもの」「劣等性」などとする認識枠組そのものや価値観の変容については何も言及されていないとの批判もある²⁾。子どもの障害を受容する過程において、親が自らの

「認識枠組や価値観の変容」をしていくことは容易に達成できるものではないと考えられるが、この「認識枠組や価値観の変容」がどのように達成されるかについての研究はほとんどなされていないのが現状である。

そこで、子どもの障害に対する親の認識枠組みそのものや価値観の変容過程を障害児の親の会とのかかわりから明らかにすることを目的とした。こうした過程を明らかにする際、本研究では、「人が自らの環境を支配し、自己決定を成し遂げることができるようにするプロセス」³⁾と定義される「エンパワメント」に着目した。エンパワメントは多次元的概念であるとされるが、ここではエンパワメントを人間個人のレベルで表現した「心理的エンパワメント」⁴⁾として捉えている。

「心理的エンパワメント」については、「コミュニティ組織への参加」との関連⁴⁾やメンバ

*1 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
連絡先：〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-7
大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
地域看護学領域 林 知里

一のエンパワメントが多くセルフヘルプグループに起こっている⁵⁾との報告があるが、それらがどのように関連しているのかは明らかにされていない。清水ら⁶⁾はレビューにより、エンパワメントには「参加」→「対話」→「問題意識と仲間意識の高揚」→「行動」という過程があることを報告しており、他にも、多くの研究者が、エンパワメントに必要な要素として「参加」をあげている⁷⁻¹⁰⁾。

本研究では、エンパワメントがプロセスを含む概念であることを考慮し、以下の目的をたてた。

- 1) 障害児の母親に親の会（以下SHG）での活動の経験を振り返ってもらい、親の「心理的エンパワメント」とSHGへのかかわり方のプロセスを明らかにする。
- 2) それらふたつのプロセスがどのように関連しているのかを明らかにする。

II 研究方法

1. 対象の選定とデータ収集

異なる2都市において活動している2つの障害児の親の会の代表者に協力を依頼し、それらのSHGに参加している「母親」16人と「父親」1人にインタビューを行った。母体が同じであるこれらのSHGの主たる活動目的は、「障害をもつ子どもたちのために発達に合ったおもちゃを選び、遊びを通して[人]や[もの]とのかかわりを豊かにする」ことである。対象となった「親」の年齢は30歳～58歳（平均年齢42.8歳）、障害をもつ子どもの年齢は7歳～26歳（平均年齢11.8歳）であった。SHGへの参加期間が多様になるように配慮して対象を選定した（理論的サンプリング）。まず、研究者自身が各SHGにボランティアとして参加し、現在SHGのリーダー的存在を担っている「母親」（参加期間7年）とSHGの活動に参加し始めたばかりの「母親」（参加期間1年）をサンプリングした。次に、それらの「母親」へのインタビューで得られたデータがSHGへの参加期間に左右されるものなのかを確認するために、はじめの2人の「母親」と同様の参加期間の「母

親」をサンプリングした。また、SHGを立ち上げた「母親」（参加期間10年以上）で、現在は子どもが成人したためにサポート的な役割を担っている「母親」を前述の「母親」との比較を意図としてサンプリングした。これらの「母親」は、「母親」自身も自分がエンパワメントされているような実感をもっていたため、そのパワーはどこからくるとお考えですかといった質問もインタビューに盛り込んだ。また、「父親」は自分と比べて未だ子どもの障害の受け入れができておらず、SHGにも参加しないと聞いたことが数人の「母親」のインタビューから得られたためSHGに戻って観察したところ、SHGには1人の「父親」しか参加していなかった。そこで、その唯一の「父親」を「母親」との比較を意図してサンプリングした。結果、対象となった親の参加期間は1年程度（4人）、3～7年（7人：父親1人を含む）、10年以上（5人）であった。また、子どもの障害は自閉症（14人）、脳性麻痺（1人）、全盲（1人）で、ほとんどが発達障害を伴っていた。今回の研究では、両親共に対象となった例があったため、「親」の総数は「子ども」の総数よりも1人多くなっている。

2. 質問票の作成

各SHGにボランティアとして参加し、その活動を通して母親の抱える問題やメンバー同士の関係、SHGの雰囲気や参加している「親」と「子ども」の様子を観察してメモ化し、データとした。それらのデータと先行文献にあるエンパワメントの概念やプロセスを考慮して質問票（表1）を作成した。調査期間は2000年6月から2000年11月で、インタビューは11月に実施した。

3. インタビューの実際

インタビューは質問票を用いて半構造的に行った。対象者の同意が得られた15名は面接中のやりとりをテープレコーダーに録音し、同意が得られなかった2名は研究者がその場で出来るだけ忠実に書き取った。テープレコーダーに録音した記録は、逐語文字に起こしデータとした。インタビューは1人1回、1時間半程度で、SHGの活動拠

表1 質問票

-
- ① お子さんについてお聞かせください (年齢, 性, 障害の種類, 程度, 学校, 兄弟の有無).
 - ② ご自身についてお聞かせください (年齢, 職業).
 - ③ SHGに参加したきっかけについてお聞かせください.
 - ④ SHGはご自身とお子さんにとってどのような場所ですか.
 - ⑤ SHGに参加している期間をお聞かせください.
 - ⑥ SHGに参加する以前のご自身とお子さんについてお聞かせください.
 - ⑦ SHGに参加することで, ご自身とお子さんにどのような変化がありましたか.
 - ⑧ SHGでこれまでされてきた活動についてお聞かせください.
 - ⑨ お子さんの成長過程であった問題や悩みがあればお聞かせください.
 - ⑩ お子さんの成長に対して, ご自身を振り返るとどうですか.
 - ⑪ SHGの魅力はどのようなところだとお考えですか.
 - ⑫ SHGの他のメンバーは, あなたにとってどのような存在ですか.
 - ⑬ 他のメンバーとSHG以外で会ったり, 電話したりすることはありますか.
 - ⑭ キャンプ・バザーに参加する目的はなんですか.
 - ⑮ キャンプ・バザーなどの活動を計画・企画しようとしたきっかけがあればお聞かせください.
 - ⑯ 今年のキャンプ・バザーの感想をお聞かせください.
 - ⑰ 自分の力が発揮できていると感じるときはどのようなときですか. お子さんについてはどうですか. 反対に, 力が発揮できていないと感じるときはどのようなときですか.
 - ⑱ SHG以外でなにか活動はしていますか. それはいつごろからなさっていますか. きっかけはありますか.
 - ⑲ これまでを振り返って, 今のご自身と子どもさんの人生に対する気持ちは, どのようなものですか. それは変化がありましたか. あればそのきっかけについてお聞かせください.
-

点 (12名), 喫茶店 (2名) や対象者の自宅 (2名), 公園 (1名) で行った.

4. 分析方法

データ分析には, B.Glaser and A.Straussによる Grounded Theory 法を用いた. コード化と分析をするにあたって, Glaser and Straussのいう「絶えざる比較法」¹¹⁾を用い, 分析はデータ収集と並行して帰納演繹的にすすめた.

5. 分析結果の妥当性を高める努力

本研究では, データのコード化の初期から継続して複数人で分析を行い, データ分析中においても定期的にSHGに参加しながら観察を続けることで分析結果の妥当性を高めた. また, 分析結果を対象者に返し, 調査終了後半年経過した時点において再度SHGに参加し, 対象者の反応を検証した.

以下, コアカテゴリーを【 】, カテゴリーを『 』, サブカテゴリーを〈 〉で示す. また, インタビューで得られた事例と対象者の生の言葉は≪ ≫で示す.

また, 本文中の「母親」はSHGに参加している障害児の母親をさし, 「子ども」は障害児をさす.

III 結果・考察

まず, エンパワメント・プロセスの前段階として, A. SHGとのかかわりをもつ前の段階とB. SHGとのかかわりをもつきっかけとなる〈共感〉できる〈他の当事者との出会い〉の段階を説明する.

A. SHGとのかかわりをもつ前の段階～期待していた子育てからの『逸脱』～

SHGとのかかわりをもつ前の段階において, 「母親」は思い描いていた子育てからの『逸脱』を感じていた. 『逸脱』の背景には, 生まれてくる子どもは健康であることが当たり前であるという認識や, 自分が障害児の親になるとは思っていなかったこと, そして, 子どもにはすすく成長してほしいという期待があると考えられた. これについて中司¹²⁾は, 「母親は誰でも妊娠すると, 生

まれてくる子どもに対して非常な期待を持つ。こうした期待は母親や父親が生活している社会の影響を受けやすい。一般に社会は頭の良いことや体が丈夫であることを望ましい（発達期待という）としているので、その結果、どの母親の期待も頭の良い子や健全な子どもの誕生と発育が中心となっている」と述べている。思い描いていた子育てとは違うという現実を認めたくないという気持ちから、「母親」は自分の人生に〈絶望〉し、「生まなければ良かった」とか、「この子を生んでよかったのか。なぜこんな子ができたのか」などと〈悲観的〉に考えていた。

「私は一生笑わないだろうってぐらいに思ったんですよ。もう生きる希望がないと。十字架を背負ったぐらいの気持ちで。」

また「母親」は「何を話しても健常児の母親とは話が通じない」とか「自分は一人である」といった健常児の母親からの『疎外感』を抱いているために、健常児の母親の輪に入ることができていなかった。「母親」が『疎外感』を特に強く感じていた時期は、「子ども」が保育園や幼稚園、小学校に入学する頃、もしくは入学して間もない頃で、健常児の中にいる自分の「子ども」をみることで自分の子どもとの違い（発達や行動）を歴然と認識させられるためであった。また、そのことが健常児の母親とのかかわりを消極的にさせていた。中には保育園や幼稚園の送迎時に健常児の母親との接触を完全に避け、他の母親が帰った後に子どもを迎えに行くという行動もみられた。

「毎日が二人だけの世界ですね。虚しいんですね、何を見ても、楽しいことを見ても、自分は全然そこに溶け込んでいないし、なんか浮いた感じね。あの人たちは楽しいんだけど、私は別なんだと。」

この時期にSHGに参加しない理由としては、SHGの存在を知らなかったというのが最も多かったが、知っていたが〈障害を治す〉ことに精一杯で眼中になかったという「母親」や、障害児の親のSHGへ参加することで自分の子どもが障害児であることを突きつけられるため、あえて見な

いふりをしていたと言った「母親」もいた。これらは、期待していた子どもや子育てにおける健常児の母親からの『逸脱』への対処であると考えられた。このような『逸脱』を克服するために「母親」がとった対処としては、1)〈健常児の母親とのかかわりの回避〉2)〈子どもの障害克服のための努力〉3)〈子どもの障害の直視と自分が障害児の母親であることの直視の回避〉の3つのカテゴリーが抽出された。2)〈子どもの障害克服のための努力〉の方法とは、具体的には、「母親」は期待していた状態、すなわち「子ども」を健常に近づけようと必死になることであり、「子ども」の障害を治すために病院を転々としたり、しつけを厳しくしたり、あるいは、ありとあらゆる治療法を試した後に海外まで「子ども」を連れて行くなどで、毎日の睡眠時間が1時間であったと語った「母親」もいた。ある「母親」は、「子ども」の障害を克服するために努力していたころの自分を〈いろいろとあがいていた〉とか「なぜあんなことをしていたのか」と振り返り、障害児教育が「子ども」の成長に非常に良い影響を与えたと振り返る「母親」は、なぜもっと早い段階で行かせなかったのかと後悔していた。この〈子どもの障害克服のための努力〉の度合いが過ぎると、「子ども」を〈抱え込んでしまう〉ことにもなると考えられた。

この段階での「母親」は、健常児の母親達からの『逸脱』は認めても、「子ども」の障害や障害児の母親であるという現実を必ずしも十分に受け入れていなかった。一方で、障害を治したい、「子ども」を守ってやりたいという〈母親としての責任〉を強く感じており、これらがこの時期の「母親」の活動力の源となっていた。

「いつか治るんじゃないかというという望みと、親が治してあげないといけないという責任感、自分がしっかりせんと、自分だけで治そうみたいな。」

「これは私の育て方が悪いってことでね、とにかく育てなきゃって、必死になってね。とにかく普通の子どもに育てようと

思っ、格闘でしたね。》

この〈子どもの障害克服のための努力〉は、親子共々、障害を受け入れ前向きに歩んでゆくという意味での立ち直りとは無関係であったが、中には、《あがいていた時期があったから、日ごろのこういった（SHGの）活動のほうが大事だということに落ち着いた》と語る「母親」もいた。

B. SHGとのかかわりをもつきっかけとなる段階

～〈共感〉できる〈他の当事者との出会い〉～

SHGとのかかわりをもつ前の段階の「母親」は、期待していた子ども、子育てにおける健常児の母親達からの『逸脱』のために『疎外感』を感じ、自分と「子ども」の人生に対して〈絶望〉し〈悲観的〉になっている状態であった。すなわち、パワーlessnessの状態といえる。しかし、一方で、〈母親としての責任〉という力が「母親」を支えていることは見逃せない。これは、その後のエンパワメントのプロセスをずっと支えていくものであった。そして、パワーlessnessの状態の転機となっていたのが、〈共感〉できる悩みを持つ〈他の当事者との出会い〉であった。「母親」は〈共感〉できる〈出会い〉を通して自分の気持ちを理解してもらえる体験をし、自分は〈ひとりではない〉という気持ちを抱いていた。この状況について岩田¹³⁾は、「この時、瞬時に2人は仲間になる」と述べている。

《自己紹介で、私はこうでって言ったときに、「私もそうだったのよ」って言われたその一言でたちまち元気になった。その人の顔をみたら、ニコニコ笑いながらしゃべっているから、私もあんな風にニコニコ笑ってしゃべれるときがくるんだって思えた》

この段階での「母親」は『疎外感』を抱いており、自分の「子ども」の障害はいつか治ると信じていた。しかしながら、SHGに参加することは、〈共感〉できる経験と引き換えに「子ども」の障害を直視し、自分が障害児の親であることを受容しなければならないことと感じていた。そのため、ほとんどの「母親」がSHGへの参加には〈迷い〉、〈ためらって〉いた。

多くの「母親」は、SHG内の〈共感〉できる〈他の当事者との出会い〉をきっかけに、当事者からの〈誘い〉を通じて『試しの参加』をしていた。『試しの参加』とは、近くに出かけたついでにちょっと立ち寄ってみる程度のものが多かった。それ以外のきっかけとしては、機関紙でみた（2人）、児童相談所からの紹介（1人）、近所に住んでおり活動を知っていた（1人）があった。迷いながらも参加を決めていたのは、〈子どもへの思い〉のためであった。「子ども」が楽しく遊ぶ姿を見たいという思いや、障害をもつ子どもにかかりきりになり他の兄弟をかまっていられない辛い思い、他の兄弟もいっしょに喜ばせたいという思いであった。こうした他の兄弟を含めた〈子どもへの思い〉は、先ほどの〈母親としての責任〉と同様に「母親」の活動の原動力であり、エンパワメント・プロセスを支えていくものであった。

〈共感〉できる〈他の当事者との出会い〉とその当事者からの〈誘い〉がSHGへの参加に至る主な経路であったが、最終的に「母親」に参加へと押し出していたのは、〈母親としての責任〉と〈子どもへの思い〉という内発的な動機付けであった。

Gibson¹⁴⁾は、慢性疾患児の母親を対象に研究を行い、エンパワメント・プロセスの前提条件として「責任」「きずな」「愛情」の3つを明らかにし、家庭やケアシステム、そして自分自身への「フラストレーション」がエンパワメント・プロセスの「触媒」であったと報告している。Gibsonの研究と照らし合わせると、本研究では、期待していた「子ども」、子育てにおける健常児の母親達からの『逸脱』が前提条件であり、〈母親としての責任〉と〈子どもへの思い〉が「触媒」にあたると考えられる。

以下、SHGへの『かかわり方』を軸に、参加によって「母親」が『身に付ける能力』と、SHGへの『かかわり方』に応じて「母親」が抱いていた他の当事者との関係に対する認識『参加者が経験する感覚』を段階ごとに説明する。

表2 SHGへの『かかわり方』と『かかわり方』の各段階に応じて『身に付ける能力』のプロセス

かかわり方	興味・関心・動機付けから模索的参加	模索的参加から探求的参加	探求的参加から支援的参加
定義	SHGに試しに参加してみることで、他の当事者やその子ども、グループの様子を観察する参加	SHGに継続して参加し、グループの一員として役割を担い活動する参加	SHGでの自分の役割を獲得し、参加に自分なりの意味・意義を見出して活動する参加
事例	《いろんなお母さんとか、子どもさんとか見て、考える。ああ、こんな風にしたらいんやなあとか、こんな風にしたらあかんなあとかね、客観的に。(参加期間2年)》 《毎回毎回(参加してる)ってことじゃないんで。だんだんと仲良くなれてきてるんで、気楽にさせてもらってます。(参加期間2年)》	《ほんとにこの会が必要やなっと思ってるんやったら、自分でできる範囲を分担して、自分達で作り上げていくくらいの気をもってね、やっていかないとほんとに続かないなと思うんで。(参加期間6年)》 《私自身、ここに入って視野も広がったし、できる限り手伝いたいと思ってるんですよ。(参加期間5年)》	《この子がいなかったら、もっとぐうたらしててね、それこそ「主婦は粗大ゴミ」じゃないですけど、粗大ゴミになってたなあ。(参加期間6年)》 《家と市場だけ往復してるだけじゃなくて、社会参加ができるゆうかね。出会いがあるし、勉強できるし、私自身が人間的に成長してるっていうのかな。魅力が出てくる。(参加期間15年)》
身に付ける能力	人・自分を理解する力	違いを認め尊重する人間関係を築く力	人の力を引き出す力
定義	他の当事者との関わりを通して、自己を見つめる力。自分ときちんと向き合う力。	自分と異なる考えを、ひとつの意見として認め、他の当事者を尊重する力。	人に理解されやすいように自分の経験を語り、他の当事者が自分と向き合う力を引き出す力。
事例	《すごい衝撃でした。子どもを受け入れることができていなかったなって。(参加期間7年)》 《無知からくる恐怖心、すごい恐怖心やったんですよ。どんな子かわからなかったから。自分の子や他のお子さんと接して、自分はただ知らなかっただけやってんって。(参加期間6年)》	《みんな意見が同じということはないですよ。だから、それはそれで参考にさせてもらおうし。ああ、そういう見方もあるんだって感じで受け止める。(参加期間5年)》	《悩みの真っ只中にお母さんを、経験してきた私達が、少しでも先の見通しをさくように引っ張ってやれる、そういう環境に連れ出してあげるってことが大切だと思うんです。(参加期間15年)》

C. SHGへの『かかわり方』と『かかわり方』の各段階に応じて「母親」が『身に付ける能力』のプロセス

ここでは、SHGへの『かかわり方』と『かかわり方』の各段階に応じて「母親」が『身に付ける能力』の関係を説明する(表2)。まず『かかわり方』には、1)『興味・関心・動機付けから模索的参加』2)『模索的参加から探求的参加』3)『探求的参加から支援的参加』という段階があり、各段階に対応して「母親」は、『人・自分を理解する力』、『違いを認め尊重する人間関係を

築く力』、そして、『人の力を引き出す力』を身に付けていた。これらの3つの能力は、『かかわり方』の経験の中でも「自分の客観視、相対化」<メンバーの多様性の気付き><経験の語り>を通して醸成され、形成されていた。また、1)『興味・関心・動機付けから模索的参加』とは、「SHGに試しに参加してみることで、他の当事者やその子ども、グループの様子を観察する参加」であり、2)『模索的参加から探求的参加』とは「SHGに継続して参加し、グループの一員として役割を担い活動する参加」、そして、3)『探求

的参加から支援的参加』とは、「SHGでの自分の役割を獲得し、参加に自分なりの意味・意義を見出して活動する参加」と定義された。また、それぞれの段階の特徴をよく表している事例を(表2)の下段に示した。

1. 『人・自分を理解する力』の形成 — 『興味・関心・動機付けから模索的参加』の段階—
 他の当事者とのかかわりをもつことで、「母親」は「子どもを受け入れるってできていなかったと思った」→「無知からくる恐怖心だった。自分はただ知らなかっただけだった」といった「自分の客観視・相対化」と「子どもの障害や障害児の母親である自分を直視」によって「他の当事者との関わりを通して、自己を見つめる力。自分と向き合う力」すなわち、『人・自分を理解する力』を身に付けていた。この能力は、『興味・関心・動機付けから模索的参加』の段階において他の当事者や子どもと接し、語り合う「相互コミュニケーション」の過程で得られていた。「母親」は「相互コミュニケーション」を通して他の当事者の考え

を知り、様々な「情報収集」をしながら自分と子どもにとってのSHGの意味を考えていた。また、他の当事者やその「子ども」を見ることで「子ども」とのかかわり方を学び、「子ども」と自分の「将来を見通し」、「心構え」をしていた。

この段階での「母親」は、他の「当事者を信頼」しており、「困っていることが一緒やと、ほっとする」といった「相互に理解し合える人の輪の中にいるという感覚(=『所属感』)」を経験していた(表3)。

2. 『違いを認め尊重する人間関係を築く力』の形成 — 『模索的参加から探求的参加』の段階—
 『人・自分を理解する力』を身に付けると、次に、「みんな意見が同じということはない。ああ、そういう意見があるんだって感じで受け止める」といった『違いを認め尊重する人間関係を築く力』つまり、「自分と異なる考えを、ひとつの意見として認め、他の当事者を尊重する力」を身に付けていた。この段階が前の段階と異なるのは、参加者がSHGに継続して参加していくことを決定し、

表3 SHGへの『かかわり方』の各段階において『参加者が経験する感覚』のプロセス

かかわり方	興味・関心・動機付けから模索的参加	模索的参加から探求的参加	探求的参加から支援的参加
身に付ける能力	人・自分を理解する力	違いを認め尊重する人間関係を築く力	人の力を引き出す力
参加者が経験する感覚	所属感	連帯感	つながり感
定義	相互に理解し合える人の輪の中にいるという感覚。	それぞれ違う一人一人の人間がお互いを認め合い、ひとつになって活動しているグループの一員であるという感覚。	自分の人生において、様々な出会いが繰り返され、今の自分があるという感覚。いつでも戻れる場所があるという感覚。
事例	《いろんな人と、いろいろ話するじゃないですか、お互い。困ってることが一緒やったら、ちょっとほっとするとかね。(参加期間5年)》	《私らの場合はね、恥も全部、家の恥から全部言えてってところがあるんで、お互い気楽。隠し事がないし。だから泣き言も言えるし。だから楽しいのかな。(参加期間10年)》	《何かの時に、ここ来たら誰かがいる。集まれる場所やなあ。せやし、ここは大事。(参加期間20年)》 《なんかしんどくなった時に、何事も受け入れてくれて大事にしていってくれるこの世の仲間、そういう場所があるのは、また力になってるわね。(参加期間15年)》

〈他の当事者と協力〉して〈SHGの役割を分担〉をしている点であった。「母親」は、〈SHG内の人間関係〉に対して〈円滑にするように関わったり〉、〈衝突を避けたり〉するように配慮していた。また、一方で「母親」は、当事者との〈情報交換〉を通して、多くの情報の中から自分で〈選択〉していた。「子ども」の進路の選択に関して教育委員会に直接〈交渉〉をしていた例もあり、行動も時に伴っていた。自分の生き方や「子ども」の育て方に対する〈自己選択〉や〈自己決定〉を繰り返しながら、「母親」は、生き方や育て方の〈多様性に気付き〉、その結果として自分と違う意見をひとつの考えとして認める能力すなわち、『違いを認め尊重する人間関係を築く力』を身に付けていた。

この段階での「母親」は、他の当事者との関係を「私ら」とか「家の恥から全部言えてるところがあるからお互い気楽」と捉えており、「それぞれ違う一人一人の人間が、お互いを認め合い、ひとつになって活動しているグループの一員であるという感覚 (= 『連帯感』)」を経験していた。『連帯感』を経験した「母親」は、SHGのために自分も動きたいという気持ちからさらに積極的にSHGに参加するようになっていた。これを『互酬性』、つまり、「お世話になった人やグループの為に、自分も何かの役に立ちたいと思う気持ち」と定義した。

3. 『人の力を引き出す力』の形成 — 『探求的参加から支援的参加』の段階—

以上の段階を経た「母親」は、「経験してきた私達が、今度は引っ張ってやれる、そういう環境に連れ出してあげることが大切」というように、「人に理解されやすいように自分の経験を語り、他の当事者が自分と向き合う力を引き出す力」つまり、『人の力を引き出す力』を身に付けていた。この力は、自分の経験を振り返って〈経験のまとめ〉をし、他の経験の浅い当事者に自分と「子ども」が歩んできた〈経験を語る〉ことによって得られていた。〈経験を語る〉ことは自己への理解をより深め、〈自己表現の洗練〉がなされていた。

そして、これは他の経験の浅い「母親」を導くことにつながっていた。この段階になると、「母親」は、『人の力を引き出す』ために意識的に〈障害児の母としての自分を人に関与させる〉ことで、自分の経験を生かしていた。ある「母親」は、自らがリーダーとなって新しいSHGをつくり、〈障害児の母として〉経験の浅い「母親」やボランティアとともに積極的に活動していた。言い換えれば『人の力を引き出す力』というのは、経験の浅い「母親」が『人を理解する力』を獲得しやすいように、他者にわかりやすく自分の経験を語ることで自分の経験を積極的に生かす力と考えられる。

また、この段階での「母親」はキャンプでの食事係は自分の仕事であるとか、バザーの店番は自分の仕事だとかいうように、〈SHG内の役割の獲得〉をしていた。また、「子ども」と共に現在はボランティアとして参加している「母親」は、『最初は利用者だったのが、成長して自分の得意なピアノを活かすことで今度はボランティアとして参加できるようになった。今は活動を楽しむだけでなく、グループの中の役に立つ子になったという満足感が大きい』と語った。それは同時に、ボランティアを受ける立場だった「子ども」がボランティアとしてSHGに参加できるようになるという可能性を他の「母親」に与えたため、この親子は多くの経験の浅い「母親」にとっての目標となっていた。また、「母親」はこれまでの〈出会いの意味付け〉をし、様々な人との〈出会い〉に〈感謝〉していた。そして、それらの〈出会い〉があったのは子どもがいてくれたおかげであると振り返っていた。この段階にも「お世話になった人やグループの為に、自分も何かの役に立ちたいと思う気持ち」と定義した『互酬性』の側面が強く現れていると言える。

また、この段階において「母親」は、SHGや他の当事者との関係について「集まれる場所」「しんどくなったときに、何事も受け入れてくれて大事にしてくれるこの世の仲間、そういう場所があるのは力になっている」と捉えており、「自分

表4 【出会いを力に換えていくこと】の各段階に対応したサブカテゴリー表

コアカテゴリー		出会いを力に換えていくこと		
かかわり方	興味・関心・動機付けから模索的参加	模索的参加から探求的参加	探求的参加から支援的参加	
身に付ける能力	人・自分を理解する力	違いを認め尊重する人間関係を築く力	人の力を引き出す力	
参加者が経験する感覚	所属感	連帯感	つながり感	
サブカテゴリー	自分の客観視・相対化 子どもの障害・障害児の母親である自分の直視 相互コミュニケーション 情報収集 将来を見通す 自分と子どもにとってのSHGの意味 心構え 他の当事者を信頼	他の当事者と協力 SHGの役割を分担 SHG内の人間関係を円滑にするように関わる 衝突を避ける 情報交換 選択 交渉 自己選択 自己決定 多様性の気づき	経験のまとめ 経験を語る 障害児の母親としての自分を人に関与させる 自己表現の洗練 出会いの意味付け 感謝	

の人生において、様々な出会いが繰り返され、今の自分があるという感覚、いつでも戻れる場所があるという感覚(=『つながり感』)を経験していた。

Riessman¹⁵⁾は「他者を助けることを通して、援助者は自分自身を異なって捉え、考えることを学ぶ」とし、これを“helper therapy principle”であると述べている。また、Mok et al.¹⁶⁾は、「他者を助けること、そして、自分自身が役に立つ存在であるとみることは、SHGにおける最も一般的で強力な原動力である」とし、また、「他者を助けることで、彼らは自分の価値を感じ、人生に意味を見出す」感覚を「価値があるという感覚」としている。また、岩田¹³⁾は、「セルフヘルプで展開されている援助を受けた「お礼」に「お返し」して新しい仲間を援助していくことであり、仲間から仲間へ循環していくこと」を「循環」としている。これらの概念は共通のものを指していると考えられる。本研究でも同様に、『互酬性』がSHG内の人間関係を支える重要な役割をしていることが明らかとなった。

自分が〈役に立つ存在〉であること、これを石川²⁾は「存在証明」と述べているが、これを示すには「他者」が必要であるという。最初のうちは「障害児の親」というアイデンティティを拒否することで存在証明を守ろうとするが、そのうちそれを止め、「障害児の親」として適切に振舞うことによって再び存在証明を達成しようとしている。今回の研究でも、障害児の親は、自分と「子ども」の〈経験を語り〉、他の経験の浅い当事者の『力を引き出す』ことに意味を見出していた。すなわち、「障害児の親」というアイデンティティを認めてくれる「他の当事者」の存在が、自分が「障害児の親」であることを支える重要な要因であると考察できる。

以上を要約すると、SHGに参加することで「母親」が最終的に身に付けていた力は『人の力を引き出す力』であった。この力は、自分・他者への理解をより深め、違いを認めて他者を尊重する関係を築く過程で得るものであった。すなわち、これらの3つの力を身に付けていく過程は、SHGに参加する他の「母親」との【出会いを力

に換えていく】という主体的なプロセスであった。この「母親」が『身に付ける能力』のプロセスは、SHGへの『かかわり方』の3つの段階的なプロセス、すなわち1)『興味・関心・動機付けから模索的参加』2)『模索的参加から探求的参加』3)『探求的参加から支援的参加』と対応しており、各段階において『参加者が経験する感覚』には、1)『所属感』2)『連帯感』3)『つながり感』というプロセスがあった(表4)。

Gibson¹⁴⁾によると、エンパワメント・プロセスは、1)「現実に気が付くこと」2)「批判的に内省すること」3)「責任を引き受けること」4)「続けていくこと」という4つの相があるという。また、Kieffer¹⁷⁾が明らかにした1)「入門の段階(幼年期の段階)」権威や力の構造が明らかにされる一方で、個人の参加は踏査であり未知で不確かである期間、2)「発達の段階(児童期の段階)」支援的対等な関係はもちろん、よき指導的な関係が特徴的な期間、3)「結合の段階(青年期の段階)」自己決定の際に構造上、制度上の障害となることに立ち向かい、組織的な能力やリーダーシップ能力を身に付ける期間、4)「責任の段階(成人の段階)」現実や生活する世界の構造に対する新しい個人的な知識や能力を統合する期間というエンパワメントの4つの段階は、本研究結果とよく一致している。

さらにRodwell¹⁸⁾は、エンパワメントが「ヘルピングプロセス、自己と他者を尊重するパートナーシップ、相互的な意思決定、選択の自由と責任」であることを発見し、エンパワメントを「助け合いの関係の中で、人々が自らの生活に関する選択、コントロール、決定をすることを手助けするプロセスであり、それはまた、関わる人すべてへの尊重のプロセスである」と定義している。本研究で明らかになったエンパワメント・プロセスの【出会いを力に換えていくこと】は、Rodwellの明らかにしたエンパワメントの要素を人々との出会いをポジティブに捉えた上での力の形成過程という視点から表現していると言えるであろう。

IV 本研究の限界と今後の課題

本研究におけるエンパワメント・プロセスは、個人の経験の振り返りへの着目とSHGへの参加期間という2つの視点から捉えられている。また、参加期間の長さは「子ども」の成長の軸としても捉えることができる。こうした複数の分析の軸を用いることで、エンパワメント・プロセスには3つの段階があるということが明らかとなった。ただ、このプロセスにはSHGへの参加を途中で止めた「母親」は含まれていないため、今後はこれらの「母親」に対する分析も必要であると考えられる。また、今回は個人の「心理的エンパワメント」に焦点を当てたが、社会資源としてSHGを支援する場合には、SHGのグループ全体としてのエンパワメント・プロセスもさらに検討していく必要があると考える。

文 献

- 1) Klaus MH, Kennell JH. Maternal-infant bonding. Saint Louis: C.V.Mosby, 1976: 167-208.
- 2) 石川 准. 障害児の親と新しい「親性」の誕生. 井上真理子, 大村英昭編. ファミリズムの再発見. 京都: 世界思想社, 1995: 25-59.
- 3) Simmons CH, Parsons RJ. Empowerment for role alternatives in adolescence. *Adolescence* 1983; 18(69): 193-200.
- 4) Zimmerman MA, Rappaport J. Citizen participation, perceived control, and psychological empowerment. *American Journal of Community Psychology* 1988; 16: 725-750.
- 5) Katz AH. Self-help in America: a social movement perspective. 1993. 久保絃章訳. セルフヘルプ・グループ. 東京: 岩崎学術出版社, 1997.
- 6) 清水準一, 山崎喜比古. アメリカ地域保健分野のエンパワメント理論と実践に込められた意味と期待. *日本健康教育学会誌* 1997; 4: 11-18.
- 7) Ellis-Stoll CC, Popkess-Vawter S. A concept analysis on the process of empowerment. *Advances in Nursing Science* 1998; 21(2): 62-68.
- 8) Gibson CH. A concept analysis of empowerment. *Journal of Advanced Nursing* 1991; 16: 354-361.

- 9) Corrigan PW, Faber D, Rashid F, et al. The construct validity of empowerment among consumers of mental health services. *Schizophrenia Research* 1999; 38: 77-84.
- 10) Segal SP, Silverman C, Temkin T. Measuring empowerment in client-run self-help agencies. *Community Mental Health Journal* 1995; 31: 215-227.
- 11) Glaser BG, Strauss AL. *The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research*. 1967. 後藤隆, 大出春江, 水野節夫訳. データ対話型理論の発見. 東京:新曜社, 1996.
- 12) 中司利一. 障害者心理. 京都:ミネルヴァ書房, 1988: 55.
- 13) 岩田泰夫. セルフヘルプ運動とソーシャルワーク実践. 患者会・家族会の運営と支援の方法. 埼玉:やどかり出版, 1994: 35.
- 14) Gibson CH. The process of empowerment in mothers of chronically ill children. *Journal of Advanced Nursing* 1995; 21: 1201-1210.
- 15) Riessman F. The "helper-therapy" principle. *Social Work* 1965; 10(2): 27-32.
- 16) Mok E, Martinson I. Empowerment of Chinese patients with cancer through self-help groups in Hong Kong. *Cancer Nursing* 2000; 23: 206-213.
- 17) Kieffer CH. Citizen empowerment: a developmental perspective. *Prevention in Human Services* 1984; 3: 9-36.
- 18) Rodwell CM. An analysis of the concept of empowerment. *Journal of Advanced Nursing* 1996; 23: 305-313.

(受付 2002.2.7.; 受理 2002.10.22.)

The Relationship Between Involvement in Self-Help Groups and the Psychological Empowerment of Handicapped Children's Mothers

Chisato Hayashi*¹, Mikiko Ito Brafford*¹ and Kazuo Hayakawa*¹

Purpose: This study was conducted in order to better identify the relationship between the psychological empowerment of mothers who have handicapped children and their subsequent involvement with self-help groups.

Methods: Sixteen mothers and one father, who have handicapped children and belong to 2 self-help groups, participated in our semi-structured interviews. Theoretical sampling methods were employed to have a variety of participatory lengths; one year (4 mothers), three to seven years (7 mothers and 1 father), more than ten years (5 mothers). The data was analyzed using the grounded theory approach (B. Glaser and A. Strauss).

Results: One core category of the empowerment process was identified, changing an encounter into the power, along with eleven lesser categories. All categories were defined using the following three stages of involvement with self-help groups and the abilities the mothers gained through their involvement. 1) 'from showing interest, concern to motivated into gropely involvement' ; ability to identity ones own and others strengths. 2) 'from gropely involvement to exploratory involvement' ; ability to recognize and respect differences. 3) 'from exploratory involvement to supportive involvement' ; ability to facilitate mothers empowerment, who have a short carrier as a handicapped children's mothers. The following three experiences related to empowerment development; 1) viewing themselves objectively and comparing with other mother participants, 2) awareness of the variety of members, 3) talking and narrating their own experiences as a handicapped children's mothers. [J.J.H.E.P. 2002; 10 (1·2): 9-20]

Key words: psychological empowerment, self-help groups of handicapped children's mothers, independent involvement

*¹ Dept. of Community Health Nursing, Division of Allied Health Sciences, Graduate School of Medicine, Osaka University